

2026 年度春季入学弘前大学大学院人文社会科学研究所（修士課程）第 2 期入試問題解答例
専門科目（考古学）

問 1①大湯式土器

秋田県鹿角市にある特別史跡大湯環状列石およびその周辺から出土した土器を標式として、江坂輝弥によって設定された縄文時代後期の土器型式（江坂輝弥 1957「東北一各地の縄文式土器」『日本考古学講座』3、河出書房）。大湯式の認識は研究者間で違いがあり、注意が必要である。秋元信夫は大湯環状列石周辺調査の発掘調査報告書のなかで出土した縄文時代後期前葉～中葉の土器を大湯Ⅰ～Ⅲ式に分類している。本間宏は大湯式を十腰内Ⅰ式に後続する土器型式として捉えている（本間宏 1985「縄文時代後期初頭度土器群の研究（1）『よねしろ考古』1）。

器形は、深鉢・鉢・壺が主体を占めるが、他に浅鉢、嘴がつく方口土器・注口土器・有孔土器などがある。粗製深鉢以外は小形のものが多い。粗製深鉢は、器面全体に縄文を施文したものと、口頸部が無文で、胴部との境界に二～三条の撚紐圧痕文を有するものがある。文様は磨消縄文による入組文や曲線文を施したものと、縄文施文後に沈線による幾何学文や曲線文を施したものがある。

問 1②末期古墳

7 世紀から 10 世紀にかけて東北地方北部と北海道道央部の石狩低地帯に造られた、円形を基調とし周濠を伴う小規模な墳墓で、多くは群集をなす。北海道では北海道式古墳とも呼ばれる。末期古墳は 7 世紀前半に北上川中・上流域や馬淵川流域で始まり、8 世紀から 9 世紀にかけて東北地方北部から北海道の石狩低地帯に分布範囲が広がった。十和田 a 火山灰や白頭山火山灰との関係から、地域によっては 10 世紀前半まで末期古墳の造営が続いていたことが判明している。

主体部は木棺と横穴式石室がある。最初は木棺を据えた上に墳丘が造られたが、8 世紀後半以降は、墳丘上に木棺を据えるかたちに変化した。横穴式石室をもつ末期古墳は、7 世紀末頃から 9 世紀の北上川流域に限られる。副葬品は 8 世紀前半以前には馬具や須恵器などが中心だが、8 世紀後半以降は蕨手刀や律令制の位階を示す帯金具などに変化した。

問 1③田小屋野貝塚

青森県つがる市にある縄文時代前期・中期に営まれた貝塚を伴う集落跡で、国史跡に指定され、世界文化遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成資産にもなっている。遺跡は縄文海進により形成された古十三湖に面する屏風山砂丘上に立地し、竪穴建物跡・墓・捨て場・貝塚・貯蔵穴などが検出されている。貝塚は汽水域に棲息するヤマトシジミを主体とし、コイやサバなどの魚骨、イルカやクジラなどの海獣骨が発見されている。土器や石器以外ではベンケイガイ製の貝輪の未製品が多数出土し、集落内で貝輪の製作が行われていたことが明らかになっている。日本海側では数少ない縄文時代の貝塚を伴う遺跡であり、内湾地域に

おける生業や集落の様子を知る上で重要である。

問 1④擦文土器

7世紀から13世紀にかけ、北海道を中心に南は東北北部の青森県域から北はサハリン・千島に分布する土器で、縄文土器の北大式に後続する。「擦文」の名称は器面調整のため木の篋で擦ってつけられた「刷毛目」に由来する。擦文土器は前代の縄文土器の影響が残る時期（6-7世紀、飛鳥時代）のもの、土師器の影響を最も強く受け東北地方の土師器に酷似する時期（7世紀後半-8世紀、奈良時代）のもの、擦文文化独特の土器に刻目状の文様が付けられる時期（9世紀以降、平安時代）のものに大別される。9世紀以降、道東や国後島では、オホーツク式土器と擦文土器が融合したトビニタイ式土器がつけられた。道南や道央では12世紀、道北や道東でも13世紀には鉄鍋や鉄鍋を模した内耳土鍋に取って代られるかたちで擦文土器は消滅した。

問 1⑤火山灰考古学

世界有数の火山大国である日本では、先史・有史を問わず、遺跡の発掘調査で検出される火山灰が遺構や遺物の時期を決定する指標として有効である。とりわけ約2万9千年前～2万6千年前に始良カルデラの巨大噴火で噴出した始良Tn火山灰や、約7,300年前の鬼界カルデラの大噴火に伴って噴出した鬼界アカホヤ火山灰のような大規模な降灰域をもつ広域テフラは、遠く離れた複数の地域を比較する上で重要な指標となる。火山灰を挟んでその上下の遺構や遺物を比較することで、火山噴火が人間活動に与えた影響を考えることもできる。また、土器の胎土中に含まれる火山ガラスの化学組成を分析することで、その土器がどこでいつ頃製作されたのかの手がかりが得られる。

問 1⑥山内清男

山内清男の特筆すべき研究業績は、①型式学と層位学の両方の手法を用いて日本全国の縄文土器の編年大綱を作り上げたこと（「縄文土器型式の細別と大別」、『日本先史土器図譜』）と、②縄文土器を特徴づけている縄（原体）の種類を特定したこと（『日本先史土器の縄紋』）である。一方で、山内は縄文時代の始まりについて、ヨーロッパの土器年代や矢柄研磨器などの石器の年代から約3,000年前（後に4500年前）としていたが、その後の理化学的研究の進展により、現在では山内の「短期編年」は誤りであることが判明している。また、山内が唱えた「サケ・マス論」は大きな反響を呼び、賛否両論を呼び起こしたが、現在ではやや肯定的に捉えられているようである。

問 1⑦厨子甕

洗骨・再葬の伝統のある琉球では、洗骨した遺骨を納める蔵骨器を「厨子」と呼ぶ。「厨子」には専用品と転用品がある。専用の厨子には、琉球石灰岩などの石材でつくられた石厨

子、石厨子を模した焼物の御殿型厨子、蓋のつく甕形の厨子甕などがある。厨子甕は17世紀後半から製作されるようになり、沖縄本島では火葬が普及する20世紀半ばまで、奄美群島の与論島では同じく火葬が普及する21世紀初頭まで使われていた。厨子甕の最大の生産地は那覇市内にある壺屋であり、かつては壺屋の厨子甕は沖縄の窯業製品のなかで大きな比重を占めていた。厨子甕にともなう刻書(ミガチ)と呼ばれる被葬者に関する文字情報は、琉球史を解明する上で重要な歴史資料といえる。

問1⑧ベンガラ

第二酸化鉄(Fe₂O₃)を主成分とする赤色の顔料。天然のベンガラは赤鉄鉱が広く用いられた。ベンガラは旧石器時代から使用されてきた最古の顔料の一つで、ラスコーやアルタミラの洞窟壁画でも使われている。日本では北海道の約1万7千年前の旧石器時代後期の遺跡からベンガラが付着した台石など顔料生産関連遺物が発見されており、縄文時代にはもっとも使われる顔料であった。また、日本ではベンガラは赤鉄鉱と土壌中や水中に生息する鉄細菌が水に含まれる鉄イオンからつくる顔料「パイプ状ベンガラ」が縄文時代以降併用されていた。

問1⑨六道銭

三途の川の渡し賃や冥界での旅費、あるいは六地藏への賽銭として死者に持たせる銭で、六道思想が広まった中世末以降は6枚を基本とするようになる。銭に代えて銭を模した(印刷した)紙や木片の場合もある。鈴木公雄は六道銭に使われた銭種のセリエーション分析から、寛永通宝の鑄造に伴い、それまで流通していた渡来銭から寛永通宝(古寛永)への切り替えが迅速に行われたことを明らかにした。なお、江戸時代には寛永通宝のような通用銭のほかに念仏銭や題目銭が使われることもあった。

問1⑩石製模造品

古墳時代前期から中期にかけて、祭祀や副葬品として用いられた、鏡・剣・農工具・玉類などの器物を模した小型の石製品で、滑石や碧玉など軟質の石材でつくられている。古墳の副葬品では、剣や盾などの武器・武具、刀子や斧・鎌などの農工具、鏡・櫛などの生活に関わる器物が多い。一方、集落遺跡出土のものは、剣や鏡を模したものが多く、水辺における祭祀に使われたと考えられている。

問2 考古学における葬墓制研究の目的・視点・方法について、自らの考えを述べよ。

※葬墓制に過去の社会のあり方が鋭敏に反映されていることを指摘した上で、葬墓制に関わる埋葬施設や茶毘所などの遺構、遺骨や副葬品などの遺物から過去の社会を復元するための方法について言及した記述がなされていること。

専門科目（考古学）入学試験出題意図

問1 は考古学の基本的な方法論や専門用語に関する知識を問う。

問2 は発掘調査現場での実地経験を踏まえ、遺構や遺物の観察・分析から過去の社会を復元する能力を問う。